

鉄からみた弥生・古墳時代の日本海交流

野島 永

はじめに

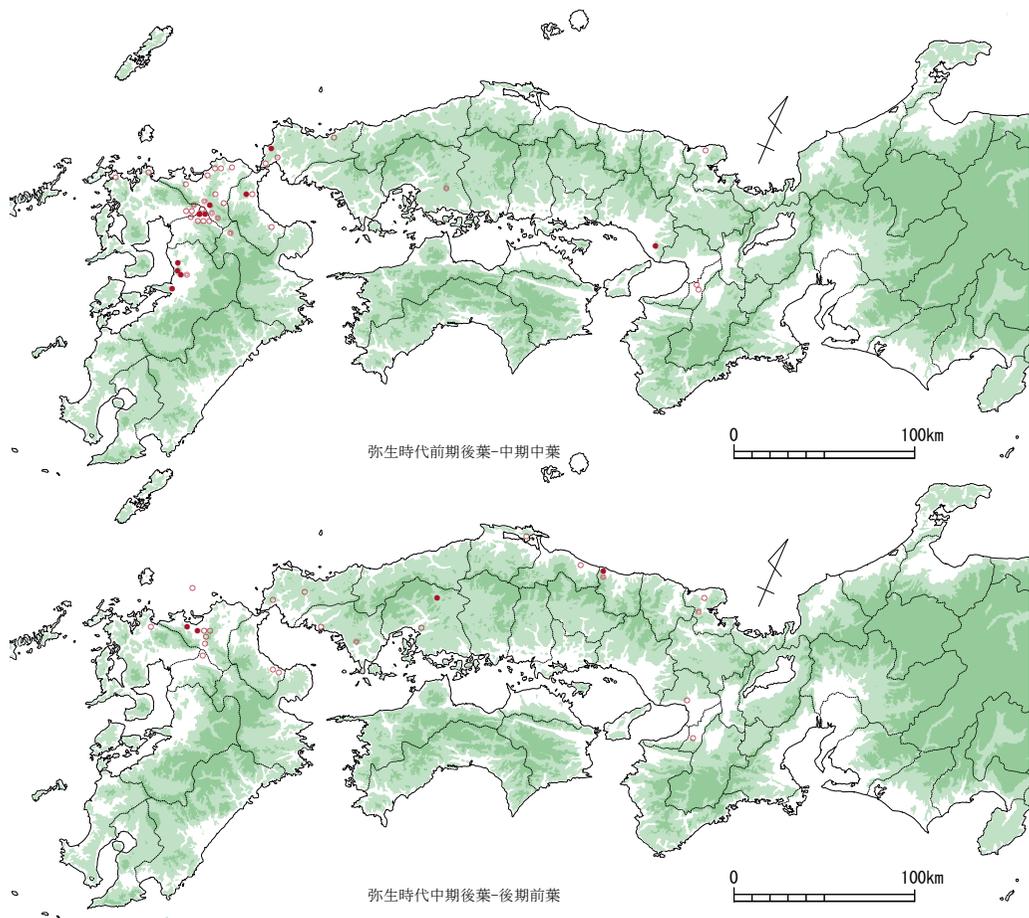
今回、富山大学考古学研究室によって富山県氷見市にある全長約70mにも及ぶ前方後円墳、阿尾島田A1号墳の埋葬主体の様相が明らかとされた。埋葬主体は粘土槨で、内部には長大な木棺があった。副葬品として鉄剣や鉄槍、鉄製農具が納められており、翡翠製玉やガラス小玉などが検出された。土器あるいは埴輪などの土製品が出土しなかったことから、その詳細な築造時期を判断することに躊躇を覚えるが、副葬された鉄製品から北陸地域に位置する本古墳についてどのような解釈ができるのか、考えていきたい。

ここではその前史として、弥生時代の鉄製品から日本海沿岸域における交流について述べる。京都府北部の丹後半島の遺跡の紹介とともに、とくに大陸から舶載された鑄造鉄斧などの鑄造鉄器破片の搬入状況、玉作りに付随する鉄製工具、方形の墳丘墓にともなう鉄製武器などの副葬品について言及し、古墳時代までに形成される流通領域について考えていきたい。

1. 鑄造鉄斧—北部九州からの拡散—

弥生時代中期には、中国東北部燕にみられる刃部と基部の幅の等しい二条突帯斧などの双合範の鑄造鉄斧が舶載された。実用品であったらしく、破損すれば、磨製石器同様に擦切りや研磨によって加工され、板状の小形斧などとして再利用された〔野島1992・村上1994〕。

このような鑄造鉄斧などの舶載鑄造品の破片の出土例は、北部九州中枢の博多湾沿岸よりもその内陸部に集中する傾向がある（第1図）。当該地域では鑄造鉄斧だけでなく、その破片と考えられる鉄片が研磨加工された状態で出土する。同一の個体と考えられる破片もみられることから鑄造鉄斧が意図的に分割・加工されていたようである。近年、広島県東広島市西本6号遺跡からも同様の鑄造鉄斧破片や鑄造鑿が数点出土したが〔篠原・井林・出野上他編1997〕、実見したところ、同一の製品から分割されたものではない。



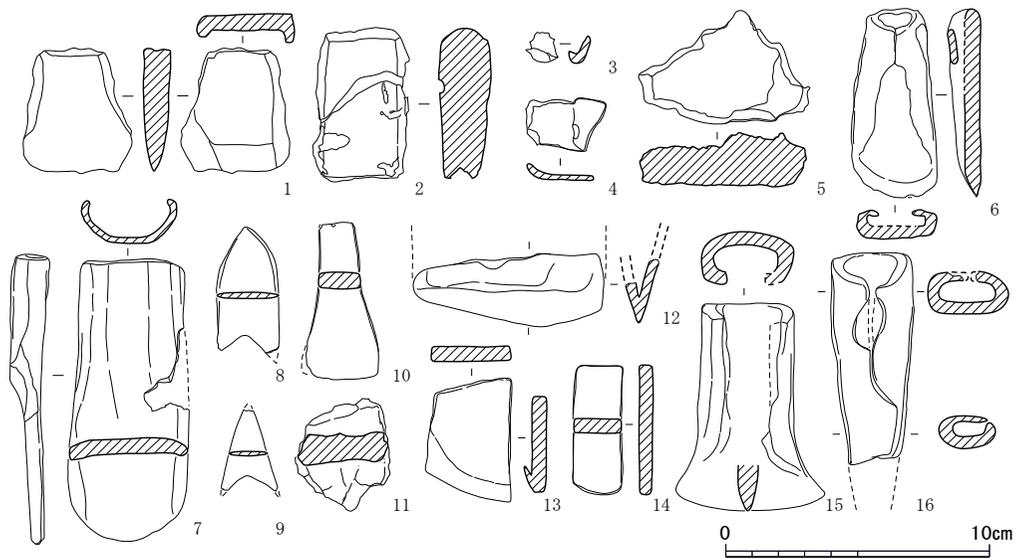
第1図 鑄造鉄器・破片の出土遺跡の分布

(●鑄造鉄器出土地 ○鑄造鉄器破片5点以上出土地 ○鑄造鉄器破片4点以下出土地)

不揃いでもあることから、北部九州の分割加工品を交易によって間接的に入手したものと考えたい。北部九州では舶載された鑄造鉄斧の一部を内陸部に搬入し、分割・加工を行い、周辺地域との交易に使用していたと推測することができる〔野島 2001〕。

このような鑄造鉄器の破片は、日本海沿岸域の弥生時代中期の遺跡でも見つかってきている。山陰地域では、山口県豊浦郡菊川町下七見遺跡・下関市綾羅木郷遺跡、島根県松江市西川津遺跡、鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡・東伯郡大栄町西高江遺跡などにある〔村上 2000, 野島・河野 2001〕。京都府北部の丹後半島では、京丹後市扇谷遺跡や途中ヶ丘遺跡出土の鉄片に鑄造鉄器の破片と考えられるものがある。近年、与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡からも同様の鑄造鉄器破片が出土した。

この日吉ヶ丘遺跡では、後述する貼石方形墳丘墓の東側、居住空間の一部が調査された。弥生時代中期中葉から後葉に属する土坑から多数の鑄造鉄器や鍛造鉄器が出土し



第2図 弥生時代中期の丹後半島出土鉄器

1. 峰山町途中ヶ丘遺跡 2～5. 峰山町扇谷遺跡 6. 舞鶴市桑飼上遺跡 7～11. 弥栄町奈具岡遺跡 12～16. 加悦町日吉ヶ丘遺跡

た〔宇野・広瀬他 2004〕（第2図）。わずかな調査面積であったことからすれば、この鉄器の出土量は驚くべきものといえる。なかには鑄造一字形鋤の刃部破片とみられるものもある。朝鮮半島の鑄造鉄斧（斧形鑄造品）は、石製鑄范で作られたため、柄を挿し込む袋部の空隙が刃部先端まで及んでいないが、戦国・漢の鑄造鉄斧（鏹）や一字形鋤は、内范外形も外范内面とほぼ相似形の鉄製鑄范で作られる。このため袋部空隙が刃部付近まで造形される。このことから日吉ヶ丘遺跡の鑄造鉄器片は、戦国から漢の鑄造技術で作られたものであろう。後述する京丹后市奈具岡遺跡にもこのような鑄造起源の鉄器片がある。鑄鉄を加熱することによって個体のまま酸化させて脱炭し、鉄の組織を強靱な鋼に変化させたものである〔大澤 1997〕。当時の漢の先端技術で作られた鉄素材の破片を入手していたことがわかる。なお、丹後半島よりも北方では、能登半島の富来町高田遺跡にも弥生時代後期の鑄造鉄斧刃部が存在する。

弥生時代中期の段階では、北部九州から山陰あるいは丹後半島への鉄の交易を想定することができる。わずかな資料だけではあるが、そのなかでも丹後半島での出土例が多い傾向があるといえる。日本列島で製作されたと思われる鍛造鉄器の存在からすれば、大陸から直接的に舶載されたわけではないように思われる。北陸地域でもこのような大陸に起源をもつ鑄造鉄器破片の出土例が増加するものと考えられ、今後注視していく必要がある。北部九州から山陰、丹後半島など遠隔地へ海上交易によってもたらされた最初の鉄であった。

2. 玉作りにおける鉄製工具の導入—山陰から北陸へ—

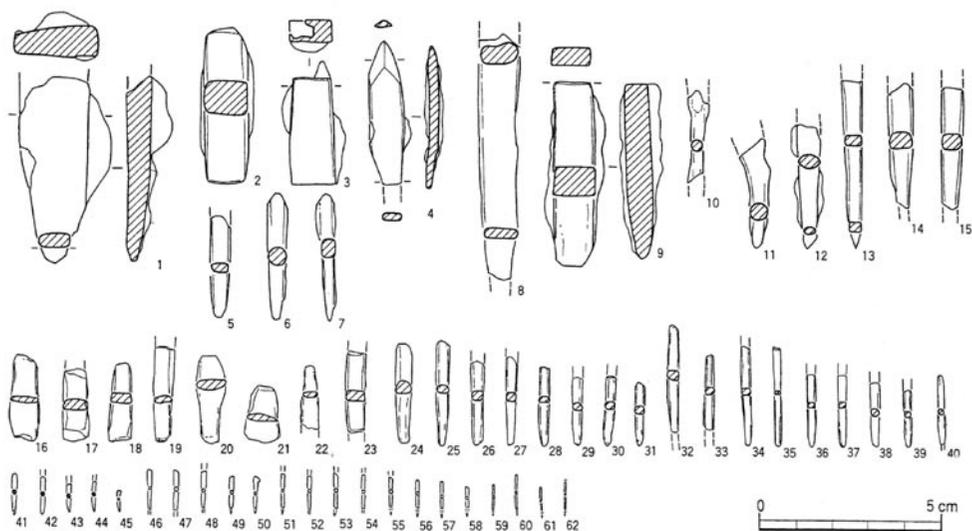
丹後半島のほぼ中央を貫流する竹野川は、幅狭い侵食谷を形成しつつ日本海へと注ぐ。奈具岡遺跡は竹野川の中流域、西岸段丘上に立地する玉作りを専業とする中期後葉の集落である。平成7・8年の調査では、74基もの竪穴遺構や竪穴式住居跡が検出された〔河野他1997〕。碧玉・緑色凝灰岩や水晶など、40kg以上にもなる原石・未成品・失敗品・剥片類をはじめとした膨大な石材が出土した。またそれとともに、石錐・石鋸・筋砥石、鉄製工具などの加工生産具も出土し、原石から製品までの製作工程が明らかとなった。さらに轆羽口や鍛冶炉の存在から鉄製工具の製作も集落内で行われていたことがわかった。玉作りに関連する多量の石英・水晶石核や板状剥片および調整剥離を施す四角柱体などとともに、小さな棒状の鉄片が共伴したが、これらの一部は小形の楔や鑿、玉穿孔の際の下孔加工に使われた鉄製加工具とみておきたい。先述した鳥取県東伯郡大栄町の西高江遺跡8号竪穴住居跡にも鉄製の小形の楔や棒状の鑿などといった鉄製工具がみられる〔野島・河野2001〕。

後期後半から終末期には、直径1mm前後で先端が針状の鉄棒が鍛冶製作され、これが穿孔用錐として使用されることとなる。以下に玉作りに伴って鉄製工具を出土した主要な遺跡について概観していきたい。

島根県松江市矢田町平所遺跡〔松本・三宅1977〕では竪穴住居跡4基と溝等が検出された。その内の1基の竪穴住居跡とその周囲をめぐる周溝から水晶原石や玉作りに伴う未成品、水晶剥片などが出土した。玉作り用鉄製工具には、大形の鑿や小形の鍬状鑿棒状鑿、方頭鍬状をなす棒状工具などがある。平所技法は、稜頂部・基部を除去した六角柱を半裁し、外側から調整剥離を加えて整形するものである。分割工程は、水晶の結晶体の半裁を行うだけであるが、整形工程は、結晶面の剥離と半裁時の剥離面の調整剥離を繰り返すことになる。多量に出土する棒状鑿の用途がこの調整剥離に利用されるものであったことが窺える。穿孔用の錐とされる横断面2mm以下の針状鉄製品はみられなかったが、棗玉穿孔途中の未成品の中には、片面から縦断面漏斗状の穿孔痕跡を持つものがあり、鉄錐によって穿孔されていたことがわかる（第3図）。



第3図 島根県平所遺跡出土
水晶棗玉破損品



第4図 北陸地方の玉作り用鉄製工具
 (1～7. 塚崎遺跡第1号竪穴 8～10. 塚崎遺跡第10号竪穴
 11～15. 塚崎遺跡第21号竪穴 16～62. 林・藤島遺跡(泉田地区))

石川県金沢市塚崎町の塚崎遺跡〔吉岡・小嶋孝・田嶋・河村他 1976〕では、13基の竪穴住居跡に綠色凝灰岩などの石核・調整剥離を施す四角柱体などの他、穿孔工程における未成品や穿孔後の未研磨品などとともに完成品も遺存していた。玉作りに利用されたと思われる鉄製工具は、板状鑿と大形の棒状工具の二種類に限定されるようであるが、大形の棒状工具の出土頻度が高い。軟質の綠色凝灰岩を素材とする塚崎遺跡例では、形割後の角柱体の粗い剥離整形を行う作業の比重が水晶など硬質玉材を扱う平所遺跡に比べて低いことからすれば、棒状鑿がより細やかな調整剥離を行う整形工程に利用されていたと見て大過ないであろう。穿孔用の錐とされる針状鉄製品はみられなかったが、穿孔途中品の管玉の穿孔形状が縦断面漏斗状になっているものがある。これには石錐穿孔痕にみられる穿孔方向に直交する回転擦痕も認められないことから、鉄錐による穿孔が想定される。なお、石川県松任市乾遺跡においても、玉作りに関連する棒状鑿や棒状工具、針状工具など鉄製工具が出土している。

福井県福井市泉田町の林・藤島遺跡〔富山 1999〕では、竪穴式住居跡 15 棟、布掘り堀立柱建物跡 4 棟、堀立柱建物跡 1 棟、土坑・柱穴・溝などが多数検出された。竪穴式住居跡 S I -01 および S I -11 から碧玉質の綠色凝灰岩を主体とした管玉製作の際の未成品や剥片、鉄製工具などが多量に出土している。長さ 1～3 cm、幅 7～8mm 程度、断面は偏平なレンズ状を呈し、一方の短辺に刃部が形成される棒状鑿、長さ 2～4 cm、幅 2～4mm、断面円形に近い調整用の棒状工具、長さ 1～2 cm、直径 1～2mm、先端が

針状に尖る穿孔用錐がある（第4図）。最も定型化した微細工具が揃う。高い規格性からすれば、鍛冶技術の進展に伴う鉄製工具の形態変化が弥生時代後期後葉以降に進んでいたことを示している。

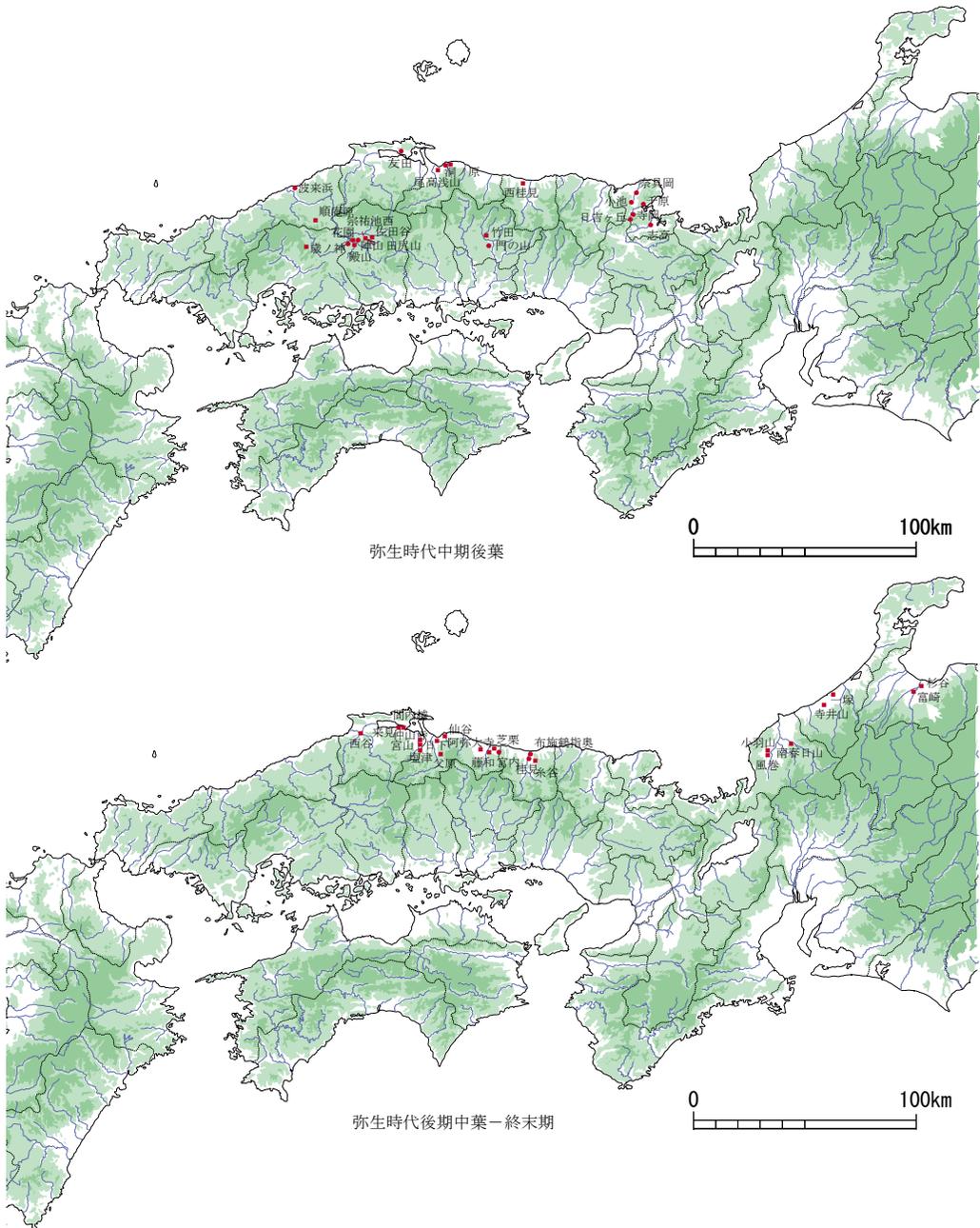
弥生時代中期段階では、山陰や丹後半島などに舶載された鑄鉄脱炭鋼の破片など良質の鉄素材を研磨加工して玉作り工具を作り出していたと考えられる。おそらくそのようにして作り出された棒状工具も穿孔工程における下穴加工にのみ利用されたと想定され、貫孔には依然石針に頼るしかなかった。しかし、後期後葉に至り、山陰から北陸の両地域を中心とした広い範囲において、ほぼ同時期に針状鉄製品（穿孔用鉄錐）が作り出されていることが判明した。おそらくは弥生時代後期の日本海沿岸域の交流には玉作りにおける鉄製工具導入に関する技術的情報の交換も含まれていたであろう。

3. 墳丘墓と副葬品—首長間交流—

丹後半島では、貼石方形墳丘墓は中期後葉に盛んに造られた（第5図）。先述した日吉ヶ丘遺跡の中期後葉に属する貼石方形墳丘墓は長辺33m・短辺17～22mの長方形で、その四辺に周溝を掘削し、墳丘斜面には一抱えもあるような平石を丁寧に貼り付けていた。〔宇野・広瀬他2004〕（第6図）。長方形の土壌に直葬された木棺の被葬者頭部付近から細身の碧玉や緑色凝灰岩の管玉500点近くが出土した。細身の管玉は一連の数珠状ではなく、頭部付近に面を成して整然と並んでいたことから、布などに縫い付けられたものかと想定された。

このような墳丘斜面に貼石を伴う墳丘墓は中国山地から山陰、丹後半島に広がっていたが、後期には影をひそめる。

後期初頭、丹後半島では丘陵を区画・整形することによって長方形平坦面を確保して埋葬を継続させつつ、接続した台状墓が丘陵全体を覆っていくようになる。墳頂平坦面における中心埋葬はさほど意識されず、ほぼ同規模の墓壙が並列、あるいは直列・直交の位置関係を持って広がる（第7図 並列散在形多埋葬）。しかし、このような埋葬手順を採る墳墓群からは、それほど顕著な副葬品をみることはない。むしろ、墳頂部の中心埋葬の墓壙が大きくなり、その周囲に埋葬が接続する二者の墓壙配置形態（墳頂部周辺埋葬圍繞形墓壙配置と墳頂部周辺埋葬重複形墓壙配置）に丹後半島の台状墓の特徴があるといつてよい。墳頂部周辺埋葬圍繞形は、初葬者と目される中心埋葬の墓壙の周囲に次々と埋葬が行われ、結果的に中心埋葬を取り囲むような墓壙配置になるものである。墳頂部周辺埋葬重複形も中心埋葬を取り囲む埋葬が行われる点では前者と一致するが、墳頂部の中心の墓壙の一端を故意に破壊するように墓壙を穿ち、重複させ続ける点

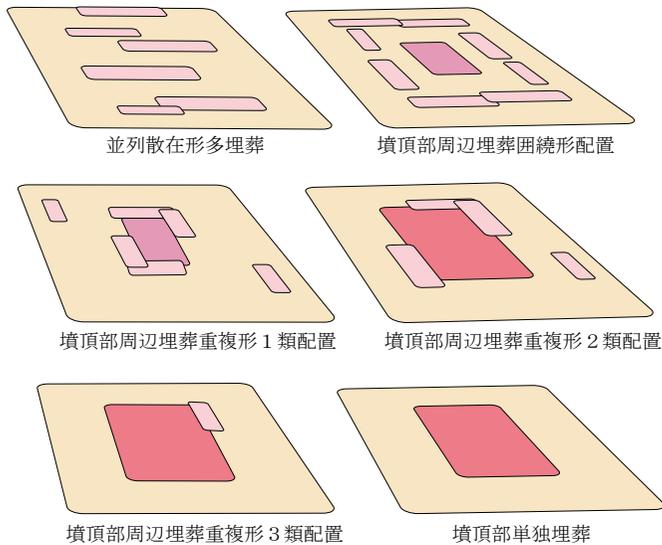


第5図 貼石をもつ方形墳丘墓と四隅突出型墳丘墓の分布
 (●貼石方形墳丘墓 ■四隅突出型墳丘墓)

が異なる。墳頂部周辺埋葬重複形には、中心埋葬の墓壙が墳頂部周辺埋葬圍繞形のそれとほぼ変わらず、周囲の墓壙よりやや大きいだけのもの（1類）と、中心埋葬の墓壙が極端に大形化するもの（2類）、さらに中心埋葬の墓壙が大きい点は二類と変わらないが、



第6図 日吉ヶ丘遺跡の貼石方形墳丘墓〔宇野・広瀬他 2004〕



第7図 丹後半島の方形台状墓の埋葬類型

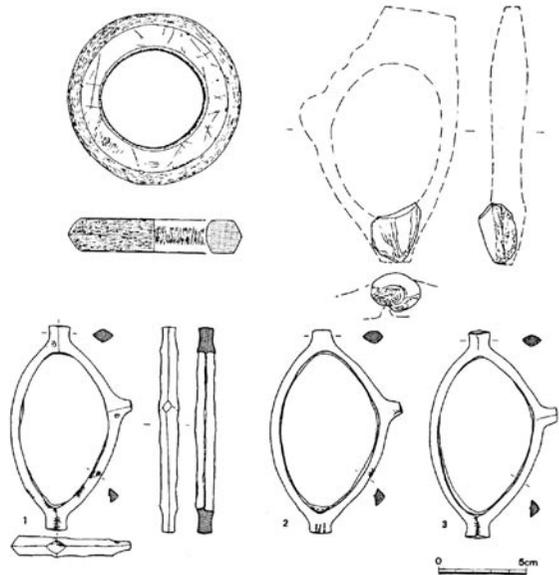
次の埋葬のために小さな墓壙が穿たれるだけになるもの(3類)に分類できる〔野島 2002a〕。

方形台状墓の大型化とともに、このような埋葬手順の共有化が起こるのは現在のところ、丹後半島に限られるようである。丹後半島から指呼の距離にある兵庫県北部の但馬地域でも方形台状墓を見ることができるが、墳頂部周辺埋葬重複形2類の存在は認め

られない。そこで、このような丹後半島に特有な墳頂部周辺埋葬重複形2類の墓壙配置を示す岩滝町大風呂南1号墓についてみていきたい。

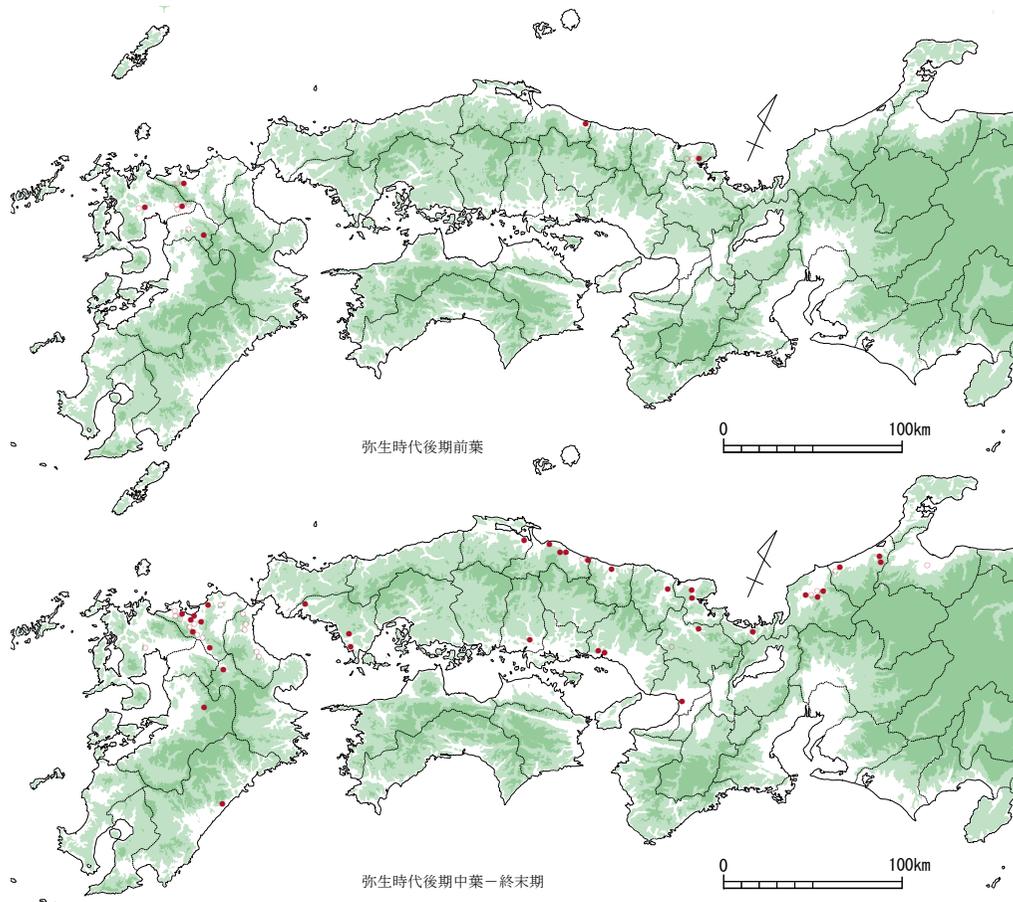
大風呂南1号墓は後期後葉に野田川下流域に造営される。第1主体部からは、鉄剣11振り、鉄鏃4、ヤス2、銅釧13、ガラス釧1、貝輪1、ガラス製勾玉11、管玉272などが副葬されていた〔白数他 2000〕(第8図)。鉄剣11振りの副葬は弥生時代のも

のとしては最多といえる。朝鮮半島あるいは北部九州からの搬入が想定されている。また、鉄製品ではないが腕輪類に銅釦とガラス釦、貝輪が揃っていることに驚かざるを得ない（第8図）。貝輪は銅釦とともに置かれており、水管溝の一部しか遺存していなかったが、木下尚子氏の観察によれば南海産のゴホウラの可能性が高いという〔白数他 2000〕。北部九州を介した入手はほぼ間違いない。有鉤銅釦もゴホウラ型貝輪に見られる上下の平坦面（螺旋側部と前溝端部の整形による形状）を意識した形態が採用されており、佐賀県武雄市茂手遺跡、長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土例などを遡源とし、本例や名古屋山王山出土例に変容していくものと思われる。ガラス釦も福岡県前原市二塚遺跡、京都府京丹後市比丘尼屋敷墳墓など北部九州と丹後半島にしか認められないものである。つまり、大風呂南1号墓出土遺物は北部九州との関係を強く示唆するといえる。とすれば、双孔をもつ鉄剣も北部九州からもたらされたものかもしれない。しかしそれだけではなく、墓壙上面に円礫堆をもつことや、出土土器に山陰あるいは北陸に系譜をもつ壺・高杯あるいは器台があることから山陰・北陸両地域とは首長葬送儀礼における交渉があったことも確認できるのである。



第8図 大風呂南1号墓第1主体の腕輪〔白数他 2000〕

次に日本海沿岸域に出土する鉄刀について見て行きたい。弥生時代後期初頭、近畿北部の丹後半島においても京都府京丹後市三坂神社墳墓群や左坂墳墓群〔今田・肥後他 1998〕から、素環頭鉄刀が出土したことは注目される。やや下るが後期中葉段階に鳥取県東伯郡宮内第1遺跡〔原田 1996〕でも、環頭部分を切断したと考えられる大刀が出土した。後期中葉から終末期、山陰から北陸にかけての地域では、北部九州よりも長大な鉄刀を多数入手していく（第9図）。出土事例からみれば、環頭を切除した鉄刀が多く、鉄刀独自の木製把拵は定型化していないようである。鉄剣に比べて鉄刀には社会的立場や地位を表徴する意味合いが低かったために、剣とは異なる独自の木製把拵の定型化が図られなかったといえる〔野島 2004〕。また、豊島直博氏によると、山陰東部と北陸両地域の鉄刀の把には片面に長方形の切り込みを入れ、把頭に段をもつ把（島根県宮



第9図 素環頭鉄刀および鉄刀の出土地
 (○素環頭鉄刀出土地 ●鉄刀出土地)

山IV号墓・福井県乃木山墳丘墓・石川県畝田遺跡出土品)があり、両地域間の関係が指摘できるという〔豊島 2004b〕。

丹後半島では後期初頭段階に素環頭小刀が見られるものの、最も副葬品が充実する後期後葉から終末期には鉄剣が副葬される場合が多い。北部九州との交易によって得られたと想定できる副葬品も多く、墳墓の形態からも山陰・北陸両地域とはやや様相が異なるといえる。ただし、墳墓上の葬送儀礼に伴う円礫堆や山陰系・北陸系土器の存在から葬儀に際しては山陰・北陸両地域との関係が依然として続けられていたと推測される。

4. 首長間交流の二者—日本海沿岸域の鉄と瀬戸内東部・畿内中枢域の鏡—

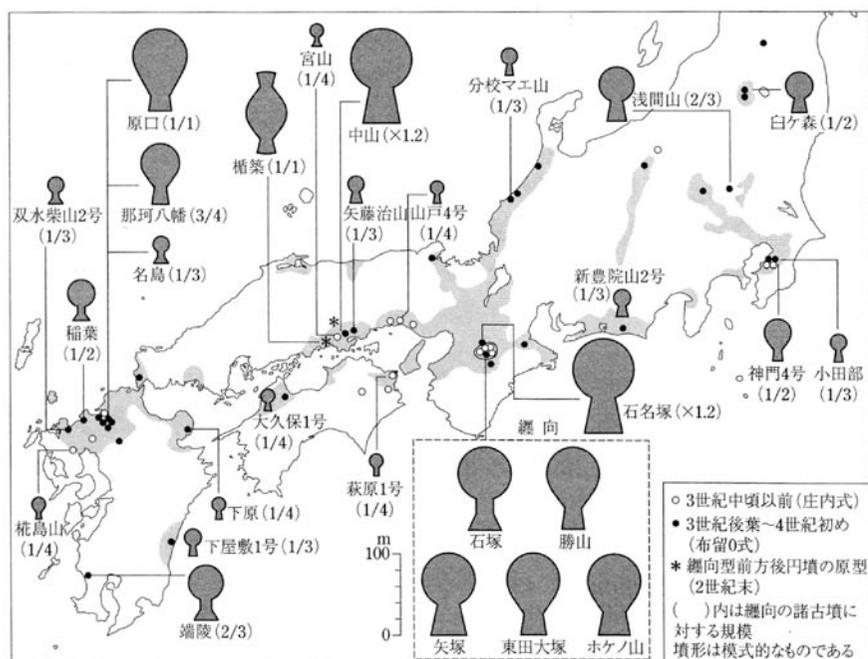
北部九州では弥生時代中期後半には大型の異体字銘帯鏡やガラス壁、金銅製四葉座飾

金具など漢の文物を舶載し、王の甕棺に副葬された。高倉洋彰氏によれば、飾金具は町田章氏の研究からみて棺飾りである可能性が高く、大型の異体字銘帯鏡や璧も棺飾りと同様に漢の皇帝から葬具として賜ったものであるという〔高倉 1995〕。北部九州では漢との政治的関係を基軸とした外交によって舶載文物がもたらされることとなる。もちろん、縄文時代以来の朝鮮半島南部社会との接触も考慮されるべきであるが、政治的關係による定期的かつ儀礼的な交換を契機に、またそれに付随してさまざまな商業ベースの消費財が交易される機会が作り出されたことは想像に難くない。

弥生時代の手工業生産の発生は、水田稲作農耕という確立した生業基盤の余剰の成果として位置付けられる。しかし、一方で佐賀県宇木汲田遺跡の糸魚川産の翡翠製玉類などをみれば、日本海沿岸域の手工業生産は、その当初から交換価値の高い奢侈品生産としての性格を受け継いでいたといえよう〔河野 2000〕。日本海沿岸域の交易が政治的關係、つまり社会的階層や政治的上下関係を固定化する貢賜関係などによる交易方法が確立する以前から行われていたものであったと想像できるのである。おそらくは鉄素材や鉄製品の入手もその当初は沈黙交易などといった伝統的的交易に基づいて行われた場合もあったと考えられるが、後期には日本海沿岸域の広い範囲で各種玉生産に伴う技術向上を目的とした鉄素材導入と穿孔用鉄錐の開発が起こる。山陰・北陸両地域における



第 10 図 京丹後市赤坂今井墳丘墓〔石崎他 2001〕



第 11 図 纏向型前方後円墳の波及 (寺沢 2000) 259 頁挿図を転載)

各種器物の類似性も高くなっていくように見える。弥生時代後期以降、奢侈品生産における情報交換や相互技術供与の関係を徐々に強化していったといえる。

鉄刀をはじめとした鉄製武器の副葬は後期初頭の丹後半島に始まり、後期後葉以降、山陰・北陸両地域の首長墳墓にも副葬されることとなる。おそらくは両地域での交易が専ら首長を中心とした大規模なものに変容していったのであろう。しかし、彼らは鉄刀の環頭を切除するなど、入手した鉄製武器を作り直したことが多い。ある意味では入手した財を自らが改変して「消費」していたとすることができるのである〔野島 2004〕。両地域の首長間交流の結果、四隅突出型墳丘墓といった首長墳墓の形態が北陸地域に伝播することになるが、両地域の墳丘規模に著しい墳丘規模の隔絶が起こる兆候は見られない。墳丘モデルの波及は両地域においてその貢賜関係を視覚的に表示するものとは言えず、葬送儀礼における首長間の交流を確認し強化する並列的な政治的關係に留まっていたものと見られる。

一方で、畿内中枢域と瀬戸内東部の間では、終末期までには画文帯神獸鏡を共有し始める。弥生時代終末期には画文帯神獸鏡は畿内中枢域に集中し、その一部が瀬戸内東部にもたらされていた状況を推測することができる〔岡村 1999〕。これとともに纏向型前方後円墳のモデルが西日本、特に畿内中枢域・瀬戸内東部から北部九州や関東南部へと普及し始める〔寺沢 2000〕(第 11 図)。直後には三角縁神獸鏡の配布とともに政治的上

下関係を墳丘規模や副葬品目の数量で際立たせるようになる。

佐々木憲一氏は前方後円墳の規格や三角縁神獣鏡などの配布を不可譲な財の贈与として行われたとみている〔佐々木 2003〕。アメリカの人類学者ワイナーは他人に譲渡し、かつ消費される財とは異なり、譲渡可能ながらも譲渡者が所有権を維持しつつ、かつ受手側に一定の慣習的な影響をもたらす財（「不可譲な富」）の存在を指摘した〔A. Weiner 1992〕。このような不可譲な財の贈与交換の連鎖によって、財の所有権の保持者である元々の贈与者には強大な政治的影響力がもたらされていったものとみられる。このような視点からすれば、日本海沿岸域にみられた首長墳墓から出土する鉄刀などと、畿内中核域からもたらされた画文帯神獣鏡や三角縁神獣鏡はともに遠隔地から舶載されたものであったとしても、これらの財の移動が政治的勾配を決定付ける度合いにはそれぞれに差異があったものと想像しておきたい。

また、日本海沿岸域の海上交易のように比較的単線的なルートしか想定できない領域では、隣地との交易の際に選択できるパートナーは相対的に少なくなる。その結果、各小地域における財の総量にはそれほど多寡は生じないはずである。しかし、畿内中核域を中核とし、瀬戸内東部や東海地域などへ向かう同心円的なルート（中心から周辺に財が移動するまでに複数のバイパスが副次的に用意できるルート、逆に言えば松木氏のいう「外部社会から輸送された物資と東方の諸地域圏から集約された交換財とがクロスする物流の結末点」〔松木 1996〕）をもつ領域では、交換される財のバランスに際立った差異が生じることが想像できる。複数のバイパスをもつルートのある領域では、常に財の交換が行えるかどうかは、その地域首長の手腕にかかってしまう場合が多い。贈与交換のルートから外れていれば不可譲な財も不足し、首長の威信を継続することができなくなることもある。このような不可譲の財の儀礼的な贈与交換に日常的な消費財の入手機会が埋め込まれていたとすれば、なおさらである。交易ルート上の地域首長と婚姻関係を取り結ぶなどして贈与交換（＝財の供給）のルートに積極的に参加することが必要になってくるものと思われる。こうした領域では、自発的に贈与交換のルートを模索し、供給者側への政治的影響下に身を置くようになる一方で各首長間の階層差が著しくなる傾向があると想像できるのではなかろうか。

注

- 注 1. なお、鑄造鉄器資料を金相学的に調査した大澤正己氏は、その多くに焼きなまし脱炭で柔軟性を付与して材質改善を図った可鍛鑄鉄製品であると指摘している。一部には金属組織の結晶の特徴（フェライト結晶にみられる柱状晶組織）から、戦国時代晩期以降、河北や

遼寧地域において鉄範（金型）による鑄造技術によって製作されたと類推される〔大澤・鈴木 1999〕。楽浪四郡の設置以前にすでに輸入されており、実用に供された点からすれば、政治的な賈賜関係を背景とした交易とは異なり、実用本意の鉄製品としての意味を付与されたものとみられる。

- 注 2. 後述する松任市乾遺跡の遺物も含めて（財）石川県埋蔵文化財センター小嶋芳孝氏のご好意で実見・実測させていただいた。記して感謝したい。
- 注 3. 日吉ヶ丘遺跡出土鉄器のなかには鍛造袋状鉄鑿（第 2 図 16）がある。先述した東広島市西本 6 号遺跡出土の鑄造鉄鑿の形態に近く、鑄造品を真似して製作したものである。これらの鍛造鉄器が搬入されたものか、当地で製作されたものか、にわかには判断しがたいが、扇谷遺跡では中期前葉の鍛冶滓が出土していることから、丹後半島での生産を考えてもおかしくはない。
- 注 4. 宇野隆夫氏は、これを冠の垂飾り（冕旒）と推定し、天子や諸侯など大夫以上の礼冠である冕の可能性も考慮すべきであるという〔宇野・広瀬他 2004〕。
- 注 5. もちろん、日本海沿岸域においても丹後半島のように朝鮮半島あるいは北部九州と直接的に交易を行ったと考えられる地域は相対的に財の総量が多く見積もられる。
- 注 6. 布留 0 式土器が各地に波及することも、食料や嗜好品など日常的消費財の広範な移動を想定することができる〔次山 2000〕。

引用・参考文献

- Annette Weiner, 1992 *Inalienable Possessions*. University of California Press.
- 池淵俊一 2001「日本海沿岸地域における弥生時代鉄器の普及」『日本海（東海）がたなく鉄の文化』日韓合同鉄器文化シンポジウム、鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会
- 石崎善久他 2001『赤坂今井墳丘墓第 3 次発掘調査概要報告』京都府遺跡調査概報第 100 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 今田昇一・肥後弘幸他 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第 14 集 大宮町教育委員会
- 宇野隆夫・広瀬和雄・加藤晴彦・野島 永 2004『丹後最古の王墓「日吉ヶ丘墳墓」出現の謎に迫る』加悦町・加悦町教育委員会
- 大澤正己 1997「奈良岡遺跡出土鉄製品・鉄片（切片）の金属学的調査」『京都府遺跡調査概報』第 76 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大澤正己・鈴木瑞穂 1999「貝元遺跡出土鉄製品の金属学的調査」『貝元遺跡』Ⅱ 九州自動車道筑紫野 I. C. 建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査 福岡県教育委員会
- 岡村秀典 1999『三角縁神獸鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66 吉川弘文館
- 河野一隆 2000「水晶製玉作と階層性－奈良岡遺跡を中心に－」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣、河野一隆・野島 永 1997「奈良岡遺跡（第 7・8 次）」『京都府遺跡調査概報』第 76 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究』法政大学出版局
- 佐々木憲一 2003「弥生から古墳へ」『古墳時代の日本列島』青木書店
- 篠原芳秀・井林秀樹・出野上靖他編 1997『西本 6 号遺跡』（財）広島県埋蔵文化財調査センター
- 白教真也他 2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第 15 集 岩滝町教育委員会
- 高倉洋彰 1995『金印国家群の時代 東アジア世界と弥生社会』青木書店
- 田代 弘他 1993「丹後国営農地開発事業（東部・西部地区）関係遺跡 昭和 63 年度、平成 3・4 年度発掘調査概要 奈良岡遺跡（第 4 次）」『京都府遺跡調査概報』第 55 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田代 弘 1994「丹後国営農地開発事業（東部・西部地区）関係遺跡 平成 5 年度発掘調査概要（4）奈良谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 60 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 次山 淳 2000「土器からみた諸変革」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会
- 都出比呂志編 1998『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』日本の歴史 02 講談社
- 富山正明 1999「福井県福井市林・藤島遺跡泉田地区」『日本考古学年報』50 < 1997 年度版 > 日本考古学協会

- 豊島直博 2004a 「弥生時代の鉄刀の把」『考古学研究』第51巻2号
- 豊島直博 2004b 「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻3号
- 中間研志・小池史哲・吉村靖徳・秦 憲二他編 1999 『貝元遺跡』Ⅱ 九州自動車道筑紫野 I. C. 建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査 福岡県教育委員会
- 野島 永 1992 「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第32・号33号 たたら研究会
- 野島 永 2001 「弥生時代における鉄器の交易」『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 野島 永・河野一隆 2001 「玉と鉄ー弥生時代玉作り技術と交易ー」『古代文化』第53巻第4号（財）古代学協会
- 野島 永・高野陽子 2002 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（3）」『京都府埋蔵文化財情報』第83号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島 永 2002a 「丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって」『青いガラスの燦き』大阪府立弥生文化博物館図録24 大阪府立弥生文化博物館
- 野島 永 2002b 「弥生時代の鉄器副葬をめぐって」『考古学ジャーナル』No. 491 ニューサイエンス社
- 野島 永・河野一隆 2003 「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島 永 2004 「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集
- 橋本博文 1997 「北陸における鉄器の普及と展開」『東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』第4回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会
- P. Hage, F. Harary, B. James, 1986 Wealth and Hierarchy in the Kula Ring, *American Anthropologist*, 88.
- 松木武彦 1996 「日本列島の国家形成」『国家の形成』三一書房
- 松本岩雄・三宅博士 1977 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 島根県教育委員会
- 村上恭通 1994 「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」『熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集 先史学・考古学論究』龍田考古会
- 村上恭通 2000 「弥生時代の鉄器普及に関する一試論ー日本海沿岸地域を対象としてー」『たたら研究会創立40周年記念 製鉄史論文集』たたら研究会
- 村上恭通 2001 「日本海沿岸地域における鉄の消費形態」『古代文化』第53巻第4号（財）古代学協会
- 吉岡康暢・小嶋芳孝・田嶋明人・河村好光他 1976 『塚崎遺跡』北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団